ほっぷ すてっぷ じゃんぷ

特訓進学塾 名教

MEIKYO KODOMO くらぶ

2012年度版 第1号

塾長コラム

あんぱんち

～第二十四回～

新年度が始まりました。ご入学、ご進級おめでとうございます。また、名教においては、ご継続、新入会をしていただき、ありがとうございます。本年度の名教では、高校受験コースと私立中学受験コースで、授業システムを大幅に見直しました。より皆様のお役に立てるよう、スタッフ一同全力を尽くして参ります。どうぞよろしくお願いします。

さて、新年度第１号です。毎年、このコーナーでどんな話題をお届けしようか考えながら春休みを過ごします。新しい年度の始まりなので、できるだけ明るい話題がいいなと思っていたのですが、今年度は、以前から一度は触れておきたかった「中1ギャップ」の問題についてお伝えしようと思います。少し重たい話題ですがご勘弁ください。

「中1ギャップ」とは小学生が新中学1年生になったときに、学校生活や授業のやり方が今までと全く違うため、新しい環境になじめないことを言います。最初に新潟県教育委員会が名付けました。新中1になったとき、学習面、生活面、人間関係など、様々な面で不具合が起きるのです。問題が大きくなると、不登校となったり、いじめにつながったりします。国の調査でも、不登校やいじめの件数が中1で増加しているため、文科省、教育委員会、学校でも対策が図られています。小中連携ということで、小学6年生が中学校訪問をしたり、中学のスクールランチを食べに行ったりするのもこの取り組みの一つです。中学校の先生が小学校に出前授業に来るという取り組みもあります。

でも、果たしてこういう取り組みで、この問題を解決できるのでしょうか。私は疑問です。小学6年生の時に、2～3回だけ中学校に出かけたからといって解決できる問題だとは思えません。中学校訪問自体は意義のあることと思います。しかし、この問題の根本的な原因は、中学校の生徒指導の中に、管理教育と言われた古い考え方が残っていることにあるように考えています。小・中学校を比べてみてください。

生活面において、校則、制服などによって、髪形、服装などの管理が強くなります。先日の入学式の日も、髪の長さについて指摘をされ、本人が納得できずに帰ってきた塾の生徒がいました。もちろん校則を守らなくていいと言っているのではありませんし、小学校にだって集団生活のルールがあります。ただ校則ということだけで、子どもを管理しようとするやり方に疑問を感じるのです。服装などについて多感な時期だからこそ、もっと、子どもと向き合って、中学生らしい格好にさせるべきだと考えます。

また、学習面においては、成績がはっきりと数値化され、それが高校受験の結果を左右するということで、子どもたちを管理して勉強させるようになります。定期テストの点数がはっきりとつきます。学校によって違いはありますが、順位や段階が出されます。挙手の回数や課題提出など、教科への関心や意欲、授業中の態度までも評価の対象となります。しかも、それが高校入試の合否判定に用いられる内申点に直結します。そうすることで、子どもたちに勉強させるという管理をしているように私には見えるのです。もっと、学問の楽しみ、学ぶことの楽しさに気付かせ、学習に取り組ませるべきだと考えます。

このような例は枚挙にいとまがありません。中学校は、小学校に比べて、生徒を上から管理するという面が強くなりすぎているように感じます。もちろん、勉強、部活、生活面など、中学校生活を存分に充実させている子どもたちはたくさんいます。先生方についても、生徒の成長を願い、生徒たちと向き合っている方がたくさんいらっしゃいます。しかし、上からの管理だけでなく、もう少し、生徒を信頼し、生徒と向き合いながら、子どもたちを育てていってもいいのではないかなと思うのです。

入学式の後、塾に来た生徒に、初登校の感想を聞くと、「小学校は黄色（明るいイメージ）、中学校は灰色（暗いイメージ）だ」と言っていたことが印象的でした。その子には、通いながら楽しく充実した3年間になるようにしていこうと声をかけましたが、これから中学校生活が始まる門出の段階で、そんなイメージを持ってしまったようです。新中学1年生に限らず、何かと環境の変化の多い春は、子どもたちに変化が出やすい時期です。私も、保護者の皆さまとともに、小さな変化に気をつけながら、見守りたいと思っています。

新年度早々、堅い話が長くなり恐縮です。別件ですが、昨年末頃から知人の強い勧めで、私も、「facebook」を始めました。そこでは、我が家の愚息たちの子育て記のようなイメージで記事を投稿しています。何の参考にもなりませんが、もしよろしければ、「facebook　西川陽祐」で検索後、「友達になる」をクリックしてみてください。

塾長　西川　陽祐

今月の論語

子曰わく、知者は惑わず、仁者は憂えず、勇者は懼れず。

いいものと悪いものを見分ける目を養おう。

まず「知者は惑わず」とあります。知者とは、一所懸命にいろんな勉強をしていて、たくさんの知識がある博学な人をいいます。ただし、博学なだけでは知者とはいえません。知識をたくさん持っていて、それに加えて善悪をピシッと区別できる人でなければなりません。そういう人は、どんな出来事が起こっても迷いません。いつも適切な判断ができるということです。

次に、「仁者は憂えず」とあります。仁者とは、相手の痛みのわかる優しい心の持ち主をいいます。「憂い」というのは、思い悩む、心配する、心を痛めるというような意味です。仁者は、自分のことより人の幸せを常に願っているから、心の中に迷いや悩みがないということです。

最後に、「勇者は懼れず」とあります。勇者とは、心が強くて、物事に対して恐れずに、立ち向かっていく人をいいます。「懼れず」というのは、怖がらないことです。勇者は、どんな状態でも、正しいことをはっきりと相手に告げることができるということです。ただし、勇気の行動の中には、必ず正義がなければいけません。君たちが勇気を持って行動を起こすときには、必ずその後ろに正義があるかどうかを自分の心に聞いてみてください。

この「知、仁、勇」は一つひとつ独立しているわけではなくて、それぞれつながっているものです。すごく大切な言葉だから、ぜひ覚えておいてください。

参考図書　瀬戸謙介『子供が喜ぶ「論語」』（致知出版社）

「あたりまえだけど、とても大切なこと」

ルール 27

バスの座席に座ったら、必ず前を向いていること。ふりかえってうしろの席の人に話しかけたり、窓から顔を出したり、席を立ったりしないこと。バスを降りるときには、必ずドライバーに「ありがとうございました」とお礼をいおう。

ルール 28

校外学習に行くと、いつもとちがう人々に出会うはずだ。わたしが君たちをそういう人に紹介したときには、その人の名前をしっかりおぼえよう。見学が終わって帰るときには、その人に感謝の気持ちを伝えよう。そのとき、感謝の言葉にその人の名前を添えるのを忘れないこと。

「あたりまえだけど、とても大切なこと」～子どものためのルールブック～

（ロン・クラーク著　亀井よし子訳　草思社）より